

# 擬音語・擬態語の分析に基づく女性像の考察

— 音声・形態を中心に —

秋 元 美 晴

## 0. はじめに

日本語は擬音語・擬態語が豊富な言語だといわれている。そしてわれわれ日本人はそれらを自由に駆使することによって日常会話をはじめ小説や詩などの文学作品の表現をより豊かなものとしている。なぜ擬音語・擬態語を使用すると表現効果を高めることになるかといえ、それは大坪併治氏が言うように、「擬音語は音声の持つ特殊な情感を利用して、事物の状態を描写することばである」<sup>(注1)</sup>からである。つまり、直接感覚に働きかけていくことばなので、相手の共感に訴えることができるからである。

宮沢賢治や草野心平らはいった擬音語・擬態語の特長に着目し、その利点を効果的に利用した文学者として有名である。本稿で『由縁の女』をとりあげたのは、作者である泉鏡花もまたそうした文学者の一人であり、この作品においてイメージの象徴などに擬音語・擬態語を思いのままに使いこなしていると思われるからである。

『由縁の女』の中で、鏡花は二千をはるかに上回る擬音語・擬態語を使用しているが、特に人物のイメージの象徴に効果的に用いているように思われる。そこで、本稿ではこの作品の中で人物に使用されている擬音語・擬態語のみを取り出し、それらの意味、表記、音節数及び音声・形態との関連から人物像を浮き彫りにしていこうと思う。小説の場面の要請もあり、擬音語・擬態語のみから人物像を捉えようとするには限界があるのはある程度否めない。また、言語学的試みはとかく記述にとどまることなく客観的ではあるが説得力に乏しい。従って本稿では文学的解釈も取り入れ、文体論的アプローチを試みた。

### 1. 鏡花及び『由縁の女』について

『由縁の女』は明治六年に金沢で生まれ、明治・大正・昭和にわたり活躍し、昭和十四年に没した泉鏡花の作品である。この作品は大正八年一月から大正十年二月にかけて「婦人画報」に連載されたもので、大正十年八月に『ゆかりの櫛笥集』と改題され春陽堂より出版されている。なお、本稿は昭和五十年岩波書店より発行された『鏡花全集 卷十九』によった。『婦系図』（明治四十年）、『芍薬の歌』（大正七年）などととも鏡花の数少ない長編小説の一つである。

内容は主人公の詩人である麻川礼吉が祖父や父母の墓の改葬のために訪れた郷里の金沢を舞台に、そこで事件にまきこまれ迫害を受けたりし、ついに死に至るといふ事件を基調にしながら礼吉をめぐる従姉のお光、薄幸の露野、永遠の憧れの女性お楊、それに妻のお橘の四人の女性達との関わりを描いたものである。

### 2. 擬音語・擬態語の使用量及びその意味・表記から見た女性像

このテーマに関してはすでに“Sophia International Review vol. 11”（一九八九年三月）で考察しているので、こ

表-1

	延べ語数	異なり語数	異なり語数 延べ語数	×100(小数点以下) (四捨五入)
お光	144	70		49%
お露	104	51		49%
お楊	40	25		63%
お橘	58	35		60%

ここでは詳しく述べないが、本論との関係上その要約をのせることとする。

なお、『由縁の女』は礼吉をめぐる四人の女性達との関係が中心となって話が展開していくので、四人の女性に的をしぼり、鏡花がどのような擬音語・擬態語を用いることによってそれぞれの女性達のイメージを作り上げていったかを探ってみた。

## 2・1 使用量

四人の女性達に使用されている擬音語・擬態語の総数は三四六語で内訳は表-1のとおりである。

延べ語数がお光と露野に多いことは登場場面が多いことに起因するが、お楊は登場場面や重要な役割の割には少なすぎる。これは玉村文郎氏も「それは、音象徴語が日常口頭語の世界のもので、俗・褻(け)のことばであるからである。後述するように、促音・拗音・撥音・疊語形式など、音象徴語に多い音節・語形が幼児語にも多く見られることとも関係のあることと思われるが、疊語形式を除く古代日本語に存しなかったものであるため、どうしても雅語・晴れのことばの範疇からはみ出してしまおうのである。」<sup>(注2)</sup>と云っているように、お楊のような永遠の理想の女性に俗なことばの多い擬音語・擬態語を多用することはそぐわないためではないだろうか。

一方、異なり語数の延べ語数に占める割合はお楊、お橘、露野、お光の順となり、お楊に多種類の語が使われていることがわかる。これは先の玉村氏が続きで「『はらり』や『きらーメク』『ほろほろ』のような音象徴語からは俗な感じ、幼児的な印象を受けることはない」と指摘しているように、擬音語・擬態語にも晴れの世界のものもあることを意味しており、お楊には後者の

ものが多種類用いられているわけである。

## 2・2 意味

表12から四人の女性達の性格を探った。お光は勝気で活発で潑刺とした積極的な女である一方、そっかしく、また情にもろい面があることがわかった。特にお光にはお橘にも言えることであるが、「トン(と)」「からり(と)」などのように擬音語と擬態語の両方の用法がある語が多く使われており、このことからお光・お橘のアクティブな面がわかった。露野はおっとりとした性格である反面、その不幸な生い立ちからいつも何かに怯えている気の小さい面があることや、「ちらちら」「弱々」「よろよろ」の擬態語からわかるように「露野」という名に暗示されているごとくさわるところわけてしまうような女性として描かれていることがわかった。

お楊には姿態を表わす擬態語がいくつか使われていることから、艶なる女性であることが想像される。また、「悄然」「端然」という二字の漢語による擬態語をお楊にのみ使用していることから崇高な女性として描かれていると思った。

お橘は几帳面な女性で、また促音を含む語が多いことなどからお光と同じように活発であり落ち着いた所のない女性として描かれていることがわかった。

## 2・3 表記

『由縁の女』の擬音語・擬態語の表記は自由奔放ともいうべきで、ひらがな書きのもの、カタカナ書きのもの、ひらがなにカタカナが混ざっているもの、漢字の音・訓をあてたものと様々である。表13はそれぞれの女性達に使用されている語を表記別に分類したものであり、( )の中のパーセンテージは各表記の語数がそれぞれの女性達に使用された総語数の中で占める割合を示したものである。

表一 2

人物名	役割	頻度の高い擬音語・擬態語など		
		I. その人物に使われている頻度の最も高い擬音語・擬態語	F. Iのうち、その人物に特徴的に使われている擬音語・擬態語 A. その人物のみに使用されている語 B. その人物に多用されている語	
お光	礼吉のいとこで針屋の佐八の女房	すっ / スッ(10), 莞爾(9), 屹(7), トソ(7), さっ(6), はっ / ハッ(5), うっかり(5), ツイ(5), 衝(4), 衝 / ツツ(4), 衝(3)	A: 屹(7) B: トソ(7)・うっかり(5), ツイ(4)	からり, ガラリ, ぎう, キリリ, キリキリ, ぐつきり, クワツ, 粗 / 雑, さめさめ, しやん, しんやん, すたすた, すつきり, すつく, すく, すく, すんすん, 些, ちやん, ちよろちよろ, ちよろ, つかつか, つけ, つらつら, どころさ, ドン, のこのこ, ぼたぼた, ばつ, ひた, ひたり, ひらひら, ひらり, ふっ, ふん, ふらふら, べたべた, ぐくぐく, 襪
露野	大郷子の家に奉公している昔, 礼吉の伯母の嫁, 礼吉の温泉宿で湯女をしていた	衝(10), 密 / そつ(7), うったり / 恍惚(6), 熟(6), 莞爾(5), はっ / はっ / ハッ(5), ちらちら(4), ほんのり(4), 颯(3), うっかり(3), わなわな(3)	A: うったり / 恍惚(6), わなわな(3) B: 衝(10)・ちらちら(4)	うかうか, うろろ, おったり, おどおど, がっくり, ぐったり, くよくよ, しか, じとじと, しなしな, するする, せいせい, ダラリ, 紫々, ふらふら, ぼーつ, ぼとほと, ゆっくり, ゆっくり, ゆっくり, よろよる, 弱々
お楊	大長者雪邑の御令室, 礼吉が11歳の時の初恋の相手	すらり(8), はっ(3), スッ / すっ(2), トソ・トソ(2), はらはら(2)	A: なし B: すらり(8)	確, 惘然, すんなり, 密, たよたよ, 端然, ちらり, トソ, ふかり, むずむず
おお桶	礼吉の妻	莞爾 / 然(6), 熟(5), すっ / スッ(5), ハッ(4), 密(3), 一寸(3), きちん / 端然(2), ほんのり(2), トソ(2), ひよい(2)	A: きちん / 端然(2) B: なし	あはあは, がちやん, さっさつ, しやん, 徐々, 丁, つるり, は, ハタハタ, ぼっ, ぼっぼっ, ふう, ぶっ, ほっ

( ) 中の数字は頻度数を示している。なお、「すっ (と)」「きっ (と)」「さっ (と)」のように、「と」を伴うものは、この表の上では「(と)」を省いた。また、この表一 2 の表記は底本のとおりとした。

表-3

		ひらがな	カタカナ	ひらがな + カタカナ	漢字(訓)	漢字(音)	総語数
お	光	56 (39%)	31 (22%)	10 (7%)	32 (22%)	15 (10%)	144
露	野	52 (50%)	7 (7%)	4 (4%)	38 (37%)	3 (3%)	104
お	楊	25 (63%)	4 (10%)	0 (—)	6 (15%)	5 (13%)	40
お	橘	20 (35%)	14 (24%)	1 (2%)	21 (36%)	2 (3%)	58

お楊はひらがな書きの語の割合が63%と非常に高い割合を示しているが、これはお楊のもつ柔らかな女性らしさを象徴しているように思われた。

カタカナ書きの語とひらがなにカタカナをまぜた語の割合の高いのはお光とお橘である。これはカタカナが漢字仮名交じり文の文章において目立ちやすく、ある語を強調したり臨場感を出すためには効果的であり、お光とお橘のような活発な女性を描くには適当な表記なのではないだろうか。

露野はひらがな書きの語と漢字の訓からなるものとを合わせると約90%にも達する。これは露野の優しさ・可憐さ・脆弱さには、カタカナ書きのものや漢字の音からなるものは強すぎるためではないだろうか。

その他、漢字の音からなる語などについても考察した。

### 3. 擬音語・擬態語の音節数から見た女性像

一般に日本語の語彙は三音節の語と四音節の語とで全体の50%以上を占めると言われているが、擬音語・擬態語も三音節・四音節からなるものが多く、その中でも2×2の畳語の形をとるものが特に多いといわれている。大坪氏によれば、現代小説から集めた一七六〇語と天沼寧氏の『擬音語・擬態語辞典』に収められた一五三二語の音節数の調査の結果は、一位が四音節語(約45%、二位が三音節語(約26%、三位が六音節語(約7%、四位が二音節語(約7%、10%)だそうである。<sup>(注3)</sup>

ここで四人の女性達に使用されている擬音語・擬態語の音節数の分布を見てみると表-4のよ

表-4

人物名 音節数	お 光	露 野	お 楊	お 橘	
1 音節語	5 ( 3.5%)	11 (10.6%)	3 ( 7.5%)	3 ( 5.2%)	22 ( 6.4%)
2 音節語	69 (47.9%)	28 (26.9%)	11 (27.5%)	25 (43.1%)	133 (38.4%)
3 音節語	16 (11.1%)	9 ( 8.7%)	12 ( 30%)	10 (17.2%)	47 (13.6%)
4 音節語	54 (37.5%)	55 (52.9%)	14 ( 35%)	20 (34.5%)	143 (41.3%)
5 音節語	—	—	—	—	—
6 音節語	—	—	—	—	—
7 音節語	—	—	—	—	—
8 音節語	—	1 ( 1%)	—	—	1 ( 0.3%)
	144 (100%)	104 (100%)	40 (100%)	58 (100%)	346

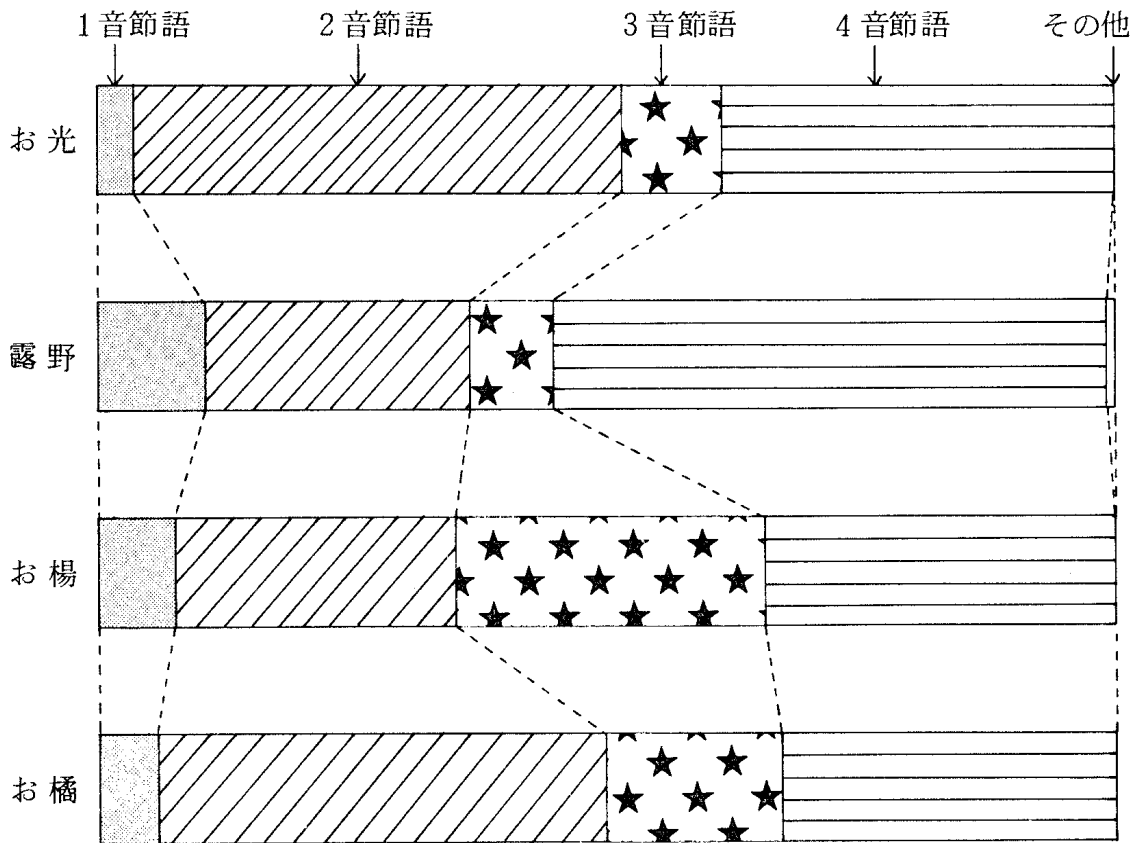
( ) の中のパーセンテージは各音節数の語数がそれぞれの女性達に使用された総語数の中で占める割合。

うになる。

この表を見ると、一位は四音節語 (41・3%)、二位は二音節語 (38・4%)、三位は三音節語 (13・3%)、四位は一音節語 (6・4%) となり、四音節語が一位であることにはかわりないが、その他の音節数の語の順位及びパーセンテージは大坪氏の調査の結果とは大分異なる。これは大坪氏の調査は広く一般的に擬音語・擬態語を集めたものの結果であるのに対し、表-4は人間、特に女性のみに使われた擬音語・擬態語のみを対象とした結果からくる相違であるかもしれない。原因ははっきりしないが、鏡花は四人の女性達を描くに当たって、音節数の短い語を多く使用していることがわかる。そして、先の大坪氏の調査と比較し、三音節語が少ないのに対し、一音節語・二音節語が多いのが目立つ。

次に、それぞれの女性達に使用された総語数の中で各音節数の語数がどのぐらいの割合を占めるか見ていきたい。次頁のグラフは表-4の( )の中のパーセンテージを見やすいように帯グラフにしたものである。

2・2及び2・3で見てきたようにお光とお橘には意味の面でも表記の面でも類似した擬音語・擬態語が使われており、女性像にも似た面があるのではないかとしたが、ここでも類似性が認められた。つまり、お光とお橘には一音節語と二音節語の占めるパーセンテージが高いということである。お光



は一音節語と二音節語を合わせると51・4%となり、お橘は48・3%と、ともに約50%を占める。大坪氏の「短い擬音語、すなわち音節数の少ない擬声語は、単純で時間的に短い状態を表し、長い擬声語、すなわち音節数の多い擬声語は複雑で時間的に長い状態を表す」<sup>(注4)</sup>という意見から性格を考えた場合、お光とお橘の二人は、単純です早く行動する傾向があるといえるのではないだろうか。

音節数の多い擬音語・擬態語を何音節の語からと大坪氏は明示していないが、帯グラフから判断して四人の女性達に使用された語から考えた場合、四音節語以上の語がそれに該当するとする。そうした場合、53・9%と最も高いパーセンテージを示すのは露野になる。先に引用した大坪氏の意見から露野の性格を考えると、露野は四人のうち最も複雑でゆっくりとした女性ということになる。

#### 4. 擬音語・擬態語の音声・形態から見た女性像

ソシユールをもち出すまでもなく、一般に言語は恣意的なものであり、その語に与えられている音声とその語が表している



事物や事柄との間には何の関係もなく、ある言語を使用している人々の間の間いわば約束事として慣習的に用いられていない。

擬音語も擬態語もそういった社会的な記号体系である言語の一部であることに変わりはない。例えば、よく引き合いに出されるニワトリの鳴き声は世界中変ろうはずがないのに日本語ではコケッコ、英語では cock-a-doodle-doo、フランス語では cocorico、ドイツ語では kikeriki、中国語ではククミー、朝鮮語ではコッキョーというふうである。つまり、それぞれの言語の音声条件に従って表現されるので、各言語によって異なるのである。

しかし、擬音語であるニワトリの鳴き声は上記の各言語において、すべて [k] 音を含んでいる。また、擬態語は擬音語のように音響とは直接的に関わりがあるわけではないが、人間の共感覚を通して語形に転換して表現したものである。このことから擬音語も擬態語も語形と意味との間にある程度合理的な結びつきがあると考えることができよう。もちろん方言の擬音語・擬態語がその方言の使用されていない地域では何の意味であるかわからない場合があるように、先にも述べたように擬音語・擬態語も言語の一部である以上恣意的な面があることは確かである。しかし、漫画やCMなどで頻繁に使われる造語の擬音語・擬態語がある程度類推できるということは、やはり擬音語・擬態語が他の語彙とは異なり、語形と意味との間に関係があることは事実である。ここでは、以上の観点に立ち、それぞれの女性に使用されている擬音語・擬態語を音声・形態の面から女性像との関係を見ていきたい。

柴田武氏は現代語の擬音語・擬態語の代表的なものを音節数（拍数）と組み合わせによって十三の型に分類し、これらは語根二拍を基調とし、これにイ・ツ・ン・ー・リ音などと組んでニュアンスの違いを表し、一方二拍以上の疊語によって、強調・緊張・連続・延長などを表現していくという法則が成立しており、各音について、それぞれの型が並行して規則的に変化する傾向が見られるとし、例として、

コロ↓コロッ↓コロン↓コロリ↓コロコロ↓コロンコロン↓コロリコロリ  
などを挙げている。<sup>(注5)</sup>

ところで、「コロ」に対して「コロッ」は突然転がったり倒れたりする場合の表現で、「コロン」はややはずみがついた感じが、そして「コロリ」は「コロッ」よりは少し緩やかに感じられる。「コロコロ」は連続して転がる音や様子を、そして「コロンコロン」はひと転がりずつ小休止があり、「コロコロ」よりゆっくり転がる様子を示している。このような意味の違いは促音・撥音・長音・リ音・繰り返しという「コロ」のヴァリエーションからくるものである。

ここでは擬音語・擬態語は一音節か二音節（これが最も多い）、あるいはそれ以上の音節からなる基本形に特殊音節やリ音、また清音と濁音・半濁音の対立や繰り返しという型より出来ているものと考え（もちろん、基本形のみで用いられるものもあるが、その中に上にあげたような特殊音節やその他のものがある場合は音象徴としての意味上の効果は共通していると考えられる）、それぞれの型のあらわれる頻度から女性像を見ていくことにする。ここでは二字の漢字からなる漢語の擬態語である「悄然」と「端然」と一字の漢字からなる「凜」は除く。

なお、それぞれの型の語形と意味との関係については大坪氏<sup>(注6)</sup>と泉邦寿氏<sup>(注7)</sup>に詳しいので、ここではお二人の見解をまとめることとする。

#### 4・1 促音を含む擬音語・擬態語

促音は息を急に止めることによって出されるつまる音である。そこから物音や動作などの瞬間性、す早さ、一回性などを表わす効果がある（例、ペタ↓ペタッ、コロリ↓コロリッ）。また、「キッ」「グッ」「ポカッ」のように力の籠もった急迫した感じや破裂後の空虚な感じを伴う。

促音は表―5を見ればわかるように、二音節語・三音節語・四音節語それに八音節語に見られる。これは一音節語を除

く、この作品にみられるすべての音節にわたって見られることを示している。

表-5

	お光	露野	お楊	お橋	
屹 (きつ)	7				7
颯 / サツ / さつ	6	4	3	1	14
粗 / 雑 / ざつ	2				2
熟 (ぢつ)	4	6	1	5	16
すツ / スツ / すつ	10		2	5	17
ずツ / ズツ	2	1			3
密 / そつ	4	7		2	13
悚然 / 慄然 (ぞっ)	1			1	2
衝 (ツゝ)	4				4
はツ / ハツ / はつ	5	5	3	4	17
ぱつ	2			1	3
ふツ	1			1	2
ぶつ				1	1
ほつ					1
クワツ		1		1	1
すツく	1				1
ちよつと	4	1		3	8
ぽーつ		1			1
うつかり	5	3			8
うつとり / 恍惚		6			6
おつとり		1			1
がつくり / がツくり		2			2
くつきり	2	2			4
ぐつたり		2			2
さつさつ				1	1
しつとり	1		1		2
すつきり	1				1
すつくり	1				1
どつさり	1				1
につこり	9	5		6	20
ばつたり		1			1
ばつちり	1				1
ばつぱつ				1	1
ひつたり	1				1
ゆつくり		1			1
ゆつくりゆつくり		1			1
	75	50	10	33	168

表-6

	延べ語数	異なり語数
促音を含む語	167 (48.3%)	35 (29.1%)
撥音を含む語	39 (11.3%)	14 (11.7%)
長音を含む語	3 (0.9%)	3 (2.5%)
長音と促音を含む語	1 (0.3%)	1 (0.8%)
特殊音節を含まない語	136 (39.3%)	67 (55.8%)
合計	346 (100%)	120 (100%)

( )の中のパーセンテージは延べ語数・異なり語数の総語数に占める割合。

表-7

	お光	露野	お楊	お橘
促音を含む語	75(52.1%)	49(47.1%)	10 (25%)	33(57.0%)
撥音を含む語	17(11.8%)	7( 4.9%)	6 (15%)	9(15.5%)
長音を含む語	1( 0.7%)	—	—	2( 3.4%)
長音と促音を含む語	—	1( 0.7%)	—	—
特殊音節を含まない語	51(35.4%)	47(45.2%)	24 (60%)	14(24.1%)
	144(100%)	104(100%)	40(100%)	58(100%)

( )の中のパーセンテージはそれぞれの語の語数がそれぞれの女性達に使用された総語数の中で占める割合。

また、促音を含む擬音語・擬態語はよく使われており、表-6からもわかるように延べ語数の総語数に占める割合は48・3%、約50%であることから四人の女性達に多く使用されていることがわかる。

ここでそれぞれの女性達にはどのぐらいの特殊音節を含む語が使われているのか見てみたい。

促音を含む語が最も高い割合を示しているのはお橘(57%)、次いでお光(52・1%)である。この二人の性格にかなりの共通点のあることは随所で述べてきたが、ここでも同じことがいえる。促音を含む語を頻繁に用いることによって動作のすばやさや活発な面を表現している。特にこの二人にだけ、半濁音と促音を含む語(お光には「ぱつちり」、お橘には「ぱつぱつ」「ぷつ」の二語が、また二人に共通に「ぱつ」が使われている)が使用されていることから、この二人の潑刺とした様子がわかる。

この二人とは対照的に促音を含む語の使用が少ないのはお楊である。お楊は永遠の理想の女性であり、大

長者雪邑の御令室であり、何人もの女中にかしずかれて暮らしている女性である。そのような女性には促音を含む語がもつ瞬間性や力の籠もった急迫感などは合わないであろう。

露野にも促音を含む語が多く使われている。これは2・2でも述べたが、露野は性来、おっとりとした静かな女性であるが、不幸な生い立ちやみじめな環境におかれているため怯えたり、逃げたりすることが多く、そのために瞬間的・反射的に行動するので自然に促音を含む語が多くなるように思われる。

#### 4・2 撥音を含む擬音語・擬態語

撥音ははねる音であるから、そこから弾力性があって、跳ねる感じを表し、また動作や様子がリズムカルなことや、強く軽やかなことを強調する効果がある。

表―7を見ると、撥音を含む語が総語数の中で使われている割合が一番高いのはお橘で九語（15・5%）である。その九語は表―8のように、「がちやん(1)」「きちん(2)」「しやん(1)」「トントン(2)」「ほんのり(2)」「ポン(1)」である。「トントン」はふとんをかるくたたき音である。このうち「ほんのり」を除いて、騒々しくて軽やかで跳ねるような感じの元気いっぱいなお橘という女性の姿が目につかぶような語ばかりである。

次に割合の高いのはお楊の六語（15%）である。意外に感じるが、表―8にあるように「ほんのり」「すんなり」を除いて擬音語である。「トン(1)」「トン、トン(2)」「トントン(1)」はお楊がきせるを火鉢に当てた音である。お橘の「トントン」はふとんをたたき音であったが、同じ「トントン」でも大分違う。そして、鏡花はこのきせるを火鉢に当てた音をお楊という女性を描くのに非常に効果的に用いていると思われるので、その箇所を引用する。

トン、トン。

同じ音がする。

先刻と同じ音がする。

渠は、拂かうとして、逡巡した。

トン。

此の時、此の夜、山國中に唯一つ、お楊の雪の手が動くのである。

また猶豫った。暫時して――

トン、トン。

鐵の火鉢に密と當てた。

トン、

研がするか。……彼方より……

(512頁)

最後の「トン」は礼吉がきせるを当てて出した音である。「トン」というリズムミカルで軽やかな、澄んだ響きのする擬音語を巧みに用いることによって風情のあるお楊という女性を髣髴とさせる。同じ撥音を含んだ語でも、お橘やお光に使われている語とはその性質もまた使用法も異なる。なお、ここで「トン、トン」を二語とせず一語としたのは筆者の解釈である。「トン」「トン」と二語でなく、といって「トントン」と疊語形成にすることなく、「トン、トン」とした所に鏡花の表現意図を見たように思ったからである。

お光にも撥音を含む語は使用されているが、十七語(11・8%)と予想していたより割合が低かった。「しやん(1)」

表-8

	お光	露野	お楊	お橋	
が ち や ん				1	1
き ち ん				2	2
し や ん	1			1	2
悄乎(しよんぼり)	1	2			3
し ん み り	2				2
ず ん ず ん	2				2
す ん な り			1		1
ち や ん	1				1
ト ン	7	1	1		9
トン, トン			2		2
トン トン	1		1	2	4
ド ン	1				1
ほ ん の り		4	1	2	7
ポ ン	1			1	2
	17	7	6	9	39
各々の総語数の中で占める割合	11.8%	6.7%	15%	15.5%	

「しよんぼり(1)」「しんみり(2)」「ずんずん(2)」「ちゃん(1)」「トン(7)」（お光に使われている「トン」は、「袖を敲いてトンと合はす。(41頁12行目)」「さした傘をトンと置く。(54頁12行目)」)のようにお楊の場合と異なる)や「トントン(1)」「持った蛇目傘で、トン／＼と爪先を邪険に突いた。(50頁8行目)」のようにお光には使われており、同じ擬音語でもお楊に使われた例よりもお橋に使われたものに近い)や「ドン(1)」「ポン(1)」のうち、「しよんぼり」「しんみり」を除くと、いかにも動作が軽やかで元氣潑刺とした積極的なお光の姿が目に見えようである。

露野に使用されているのは七語(6・7%)で割合は低い。その七語も「しよんぼり(2)」「トン(1)」「ほんのり(4)」で、「しよんぼり」「ほんのり」といった種類の語が目立つ。これは露野が優しく静かな女性であり、また薄幸な女性であることに原因があると思われる。

ここで、「しよんぼり」「しんみり」「すんなり」「ほんのり」の擬態語について考えてみたい。この四語は一般に「AんBり型」といわれる型でよく見られるものであるが、次の二点から「きちん」「しやん」などとは異なると思われる。一つは、語末に「ん」

表-9

	お 光	露 野	お 楊	お 橘	
ぎ う	1				1
丁 (ちよう)				1	1
ふ う				1	1
ぼ ー つ		1			1
	1	1	-	2	4

がなく語中に「ん」があることである。これは「ずんずん」のような畳語により語中に「ん」があらわれるのは異なる。もう一つは、「ふわり」に対する「ふんわり」、「ひやり」に対する「ひんやり」のように基本形「ふわ」「ひや」にリ音がつき、その語の中に撥音が入ってできたと考えられるのは「しよんぼり」のみで、他の三語は歴史的に見ればそう言えるのかもしれないが、現時点では基本型は考えられないこと。以上の二点から、ここではあえて「しよんぼり」も含め

この四語は先の撥音を含む語の意味の規定からははズれるように思われる。この四語からは跳ねるような感じや動作や様子がリズムミカルなことは感じられず、撥音「ん」のもつ柔らかさ・円やかさとリ音のもつ滑らかさとゆったりした感じからであろうか、柔らかさや落ち着いた情趣を感じる。

お橘には「ほんのり」が、お光には「しよんぼり」「しんみり」が、お楊には「すんなり」と「ほんのり」が使われている。特に露野には「しよんぼり」と「ほんのり」が多用されている。鏡花はこれらの語を使用することによって四人の女性達のもつ、女性特有の円やかさ、優しさを表現しようとしたのであろうか。

#### 4・3 長音を含む擬音語・擬態語

長音は、音声が長くなるので物音や動作・状態などが時間的に継続することを表している。また、空間的な広がりや強調にも用いられる。

長音を含む語は、長音と促音の両方を含んだ語を合わせて、表-9が示すように四語にすぎない。

お橘に使われている「丁(ちよう)」は、



「浮氣をすると……肯きませんよ。」  
と、遠目金を丁と振った。

(343頁7行目)

のように使われているが、この「丁」の意味はよくわからない。

お光に使われている「ぎう」は「一回力を加えて押ししたり締めたりする動作をいう」(『擬音語・擬態語辞典』)とあるように、この語においては長音は強調の意味で使われていると思われる。「ぎゅうぎゅう」という語ではないところにお光の性格があらわれているような気がする。

露野に使われている「ぽーっ」は「ほかの物事に心を奪われて、意識がはっきりしないようす」(『擬音語・擬態語辞典』)とあるが、「ぽっ」に比べて、時間的にその状態が継続することと空間的な広がりがあるように感じられる。

四語と数があまりに少なすぎて、女性像を云々することはできないが、露野に使われている「ぽーっ」などは音と意味の関係からいっても露野を象徴する擬態語といえよう。

#### 4・4 リ音を含む擬音語・擬態語

リ音はある程度の柔らかさ、滑らかさ、少々ゆっくりした感じを表すことが多い。

リ音を含む語は表10に示すとおりであるが、四人のうちそれぞれの女性達に使用されている擬音語・擬態語の総語数の中でリ音を含む語の占める割合が最も高いのは37・5%のお楊である。

玉村氏によれば、古代日本語からあった、「はらり」や「きらーメク」や「ほろほろ」のような音象徴語からは俗な感じ、幼児的な印象を受けることはない<sup>(注8)</sup>とある。事実、この「ABり型」は、山口仲美氏によっても中古からあった<sup>(注9)</sup>

うで、多くの擬音語・擬態語が俗なことばに属するのに対して、晴れのことばに属するといえよう。そのような語がお楊に多用されるのは当然といえよう。お楊に使われている十五語の内訳は、「すらり(8)」、「ダラリ(1)」、「ちらり(1)」、「ふかり(1)」、「ほろり(1)」、「しつとり(1)」、「すんなり(1)」、「ほんのり(1)」である。お楊の女らしい柔らかさ、美しい姿態、優雅さをあらわすのにこの「A Bり型」の語はふさわしいのであろう。

次いで、露野の三十七語(35・6%)であるが、割合からいうとお楊の37・5%と大して変わりがない。露野のもつ古風な女性らしさ、優しさ、おっとりとした面を表現するのにリ音を含む語は効果的なのであろう。ただ、お楊と違う点は露野には「うつかり(3)」、「うつとり(6)」、「おっとり(1)」、「がつくり(2)」、「くつきり(2)」、「ぐつたり(2)」、「にっこり(5)」、「ばつたり(1)」、「ゆつくり(1)」、「ゆつくりゆつくり(2)」のように「A Bり型」の語が多用されていることである。先の玉村氏の意見を引用するまでもなく、促音を含んだ語は俗な感じが否めない。鏡花はお楊には「A Bり型」は「しつとり」の語しか用いていないのに露野には多用している。ここに鏡花のお楊と他の三人の女性達との間に一線を引いていたことがわかる。お楊はあくまでも理想の女性であり、他の三人の現実に存在する女性とは異なるのである。

お光は三十八語(26・4%)、お橘は十二語(20・7%)となっており、お楊・露野に比べて割合が低い。また、お楊・露野に使われていないで、この二人だけに使われているリ音を含む語は、「カタリ」「からり」「キリリ」「ひらり」「ガラリ」「キリキリ」「しんみり」「すつきり」「すつくり」「ちよろり」「どつきり」「ぱつちり」「びつたり」である。お楊・露野に使われているリ音を含む語に比べて、「A Bり型」でも「ガラリ」のように濁音を含むものや「ちよろり」のように拗音を含むものが目立つ。これは「A Bり型」にも見られ「どつきり」「ぱつちり」「びつたり」のように濁音・半濁音を含む語が目を引く。その他「キリキリ」のような疊語によるものなどあり、柔らかさ、少々ゆったりした感じとは逆の感じがする。これは濁音や半濁音、拗音といった音声からくるのかもしれない。同じ型の語でもそれを

表-10

	お光	露野	お楊	お橋	
カタリ				1	1
からり					1
ガラリ	1				1
キリリ	1				1
すらり		1	8		9
するり	2	1		1	4
ダラリ			1		1
ちらり			1		1
つるり				1	1
はらり	1	1			2
ひらり	1				1
ふかり			1		1
ふはり	2	1			3
ほろり	2	3	1	1	7
うっかり	5	3			8
うっとり		6			6
おっとり		1			1
がつくり		2			2
キリキリ	1				1
くつきり	2	2			4
ぐつたり		2			2
しつとり	1		1		2
しよんぼり	1	2			3
しんみり	2				2
すつきり	1				1
すつくり	1				1
すんなり			1		1
ちよろり	1				1
どつさり	1				1
にっこり	9	5		6	20
ばつたり		1			1
ばつちり	1				1
ひつたり	1				1
ほんのり		4	1	2	7
ゆつくり		1			1
ゆつくりゆつくり		1			1
	38	37	15	12	102
各々の総語数の 中で占める割合	26.4%	35.6%	37.5%	20.7%	

構成する音によってうけるイメージは大分変わる。

表-11

	お光	露野	お楊	お橘	
ぎ う	1				1
ぐ い	1				1
粗 (ざつ)	2				2
熟 (ぢつ)	4	6	1	5	14
ず ツ	2	1			3
悚然(ぞつ)	1			1	2
ド ン	1				1
ガ ラ リ	1				1
ダ ラ リ			1		1
おどおど		1			1
がちやん				1	1
がつくり		2			2
ぐつたり		2			2
さめざめ	1				1
じとじと		1			1
悄乎(しよんぼり)	1	2			3
ずんずん	2				2
どっさり	1				1
ばたばた	2				2
ばつたり		1			1
ぶるぶる	1	1			2
べたべた	1				1
むずむず			1		1
	23	17	3	7	50
各々の総語数の中で占める割合	16 %	16.3 %	7.5 %	12.1 %	

立ちや現在のみじめな身の上から暗い面がかなりある。濁音を含む語を用いることによって、その暗さや追いつめられた

4・5 濁音を含む擬音語・擬態

語

濁音は清音に比べると、一般に鈍く、暗く、濁って、大きくて強く、重く、そして不快、粗雑な感じがする。

それぞれの女性達に使用されている総語数の中で濁音を含む語の割合が最も高いのは露野の十七語(16・3%)だが、次のお光の二十三語(16%)とほとんど変わらない。露野の十七語の内訳は「熟(ぢづ)(6)」「ず(1)」「おどおど(1)」「がつくり(2)」「ぐつたり(2)」「じとじと(1)」「しよんぼり(2)」「ばつたり(1)」「ぶるぶる(1)」である。露野は今までも何度か述べてきたように、不幸な生い

表-12

		お光	露野	お楊	お橋	
ぱ	つ	2			1	3
ぷ	つ				1	1
ポ	ン	1			1	2
ぽ	- つ		1			1
ぱ	つちり	1				1
ぱ	つぱつ				1	1
		4	1	0	4	9
各々の総語数の中 で占める割合		2.7%	0.9%	-	6.9%	

現状からくる重苦しさや不快な様子が描かれているように思われる。

お光にだけ使われている濁音を含む語は「ぎう(1)」「ぐい(1)」「粗(ぎつ)(1)」「ドン(1)」「ガラリー(1)」「さめざめ(1)」「ずんずん(2)」「どつさり(1)」「ばたばた(1)」「べたべた(1)」で「さめざめ(1)」を除いて、どちらかという濁音を含む語のもつ力強く、乱暴なイメージを伴う語が多くみられる。

お楊に濁音を含む語が少ないのはわかるが、お橋にはお光と同じぐらいの割合で見られてもいいように思われるが、実際は12・1%と低い。これはお光の方がお橋よりも力強い女性として描かれているためではないだろうか。お光とお橋は確かに多くの類似点はあるが、お光とお橋は生まれも育った環境も異なる。お橋は江戸生まれの江戸育ちの女性であるから、これは次の半濁音を含む語とも関連してくるが、お光よりてきぱきした面はあるが、力強さはあまり感じられない。この辺に濁音を含む語の割合の差がでてくるように思われる。

#### 4・6 半濁音を含む擬音語・擬態語

半濁音は破裂音[p]音からくる強くはじけるような感じがする音である。

金田一春彦氏によれば、「hはより文章語的で品がいい感じがあるのに対し、pは俗語的で品が落ちる」とあるように理想の女性であるお橋には全く使用されていない。

露野には一語「ぱーつ」が使われているが、この語は長音を含んでいること、また[o]のもつ円やかで深みのある感じから空間的な広がりを感じる。この点、お光とお橋に使

われている「ぱつ」「ぷつ」「ぱつちり」「ぱつぱつ」など、促音を伴っていることから急迫した感じが強くする語や、また「ボン」のように撥音を伴っていることから、より跳ねるような感じのする語とは性質を異にするように思われる。これらの語の使用により、お光、お橘の元気で潑刺とした面が強調されているように感じられる。

#### 4・7 繰り返しの擬音語・擬態語

畳語の型をとる語は反復・継続性を示す。

擬音語・擬態語に畳語によるものが多いことはよく知られている。特に「A B A B」の型をとるものが多い。表13を見ても、「衝(ツゝ)」と、「さめざめ」「ゆつくりゆつくり」を除いて「A B A B型」である。

表13からもわかるように、それぞれの女性の総語数の中に占める繰り返しの語の割合は露野25%、お楊22・5%、お光20・1%となっており、三人とも20%台を占めている。露野は最も高い割合を示しているが、これはいつも何かに怯えている露野の気持ちを実に表しているような気がする。右へ左へと絶えずゆれ動いている微妙な、そしてかなしい露野の心が、「うろうろ」「おどおど」「くよくよ」「じとじと」「わなわな」などの語に象徴されているように思われる。また、その反面、八音節からなる「ゆつくりゆつくり」という語からおっとりとした露野の一面を見るような気がする。

お光に使用されている「キリキリ」「すたすた」「ずんずん」「つかつか」「ばたばた」「べたべた」などからは同じ反復・継続でもあふれるような元気のよさを感じるし、お楊に使用されている「たよたよ」「なよなよ」などの姿態を描写する語からは、女性特有の柔らかさ、しなやかさを繰り返すことにより強調しているように感じられる。

四人の中でお橘は13・8%と最も低い割合となっている。これは4・5でも述べたように江戸っ子のお橘のてきぱきとしたせっかちな面の表れではないだろうか。反復・継続といった畳語形式の語より、お橘には促音を含む語の方がその性

表-13

	お光	露野	お楊	お橋	
衝(ツ>)	4				4
あはあは				1	1
うかうか		1			1
うろうろ		1			1
おどおど		1			1
キリキリ	1				1
くよくよ		1			1
さつさつ				1	1
さめざめ	1				1
じとじと		1			1
しなしな		1			1
すたすた	1				1
スヤスヤ	2				2
するする	1	1	1		3
ずんずん	2				2
せいせい		1			1
徐々(そろそろ)				1	1
たよたよ			1		1
ちらちら	1	4			5
つかつか	1			1	2
つけつけ	2				2
つらつら	1				1
トン、トン			2		2
トントン	1		1	2	4
萎々(なえなえ)		1			1
なよなよ		1	1		2
のこのこ	1				1
ハタハタ				1	1
ばたばた	2				2
ぱつぱつ				1	1
はらはら	2	1	2		5
ひらひら	1				1
ふらふら	1	1			2
ぶるぶる	1	1			2
べたべた	1				1
ほとほと		1			1
ほろほろ		1			1
むくむく	1				1
むずむず			1		1
よろよろ		1			1
弱々(よわよわ)		2			2
わなわな		3			3
ちよろちよろ	1				1
ゆつくりゆつくり		1			1
	29	26	9	8	72
各々の総語数 中で占める割合	20.1%	25%	22.5%	13.8%	

格にふさわしいように思える。

## 5. おわりに

以上、擬音語・擬態語の音節数と音声・形態と女性像との関連を見てきた。2で見たように、お光とお橘には類似性があり、ともに一音節語・二音節語と短音節語の使用が目立ち、おっとりとした露野には四音節以上の語が多く使われていることもわかった。また、擬音語・擬態語の音声・形態の面からも促音のような瞬間性、す早さなどを表すものや半濁音を含む語などはお光・お橘に多く使われることや、「A Bり型」の晴れの語はお楊のような理想の女性に多く使われることがわかった。また、濁音を含む語は暗く不幸な露野や力強く乱暴なお光に多く使われ、俗で品のない半濁音を含む語はお橘に多用され、そのてきぱきとしたせっかちな女性像を表現するのに効果的に用いられていることがわかった。繰り返しによる擬音語・擬態語もそれぞれの女性にふさわしく利用されていることがわかった。

### 注

- (注1) 大坪併治『擬声語の研究』P 13参照  
(注2) 玉村文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」P 5参照  
(注3) 大坪併治『擬声語の研究』P 39参照  
(注4) 大坪併治『擬声語の研究』P 44参照  
(注5) 柴田武「12 擬音語・擬態語」(『日本語百科大事典』) P 442参照  
(注6) 大坪併治『擬声語の研究』P 118～120参照  
(注7) 泉邦寿「擬声語・擬態語の特質」P 124～132参照  
(注8) 玉村文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」P 5参照  
(注9) 山口仲美『平安文学の文体の研究』  
(注10) 金田一春彦「擬音語・擬態語概説」(『擬音語・擬態語辞典』) P 20参照



## 参考文献

1. 渡邊実「象徴辭と自立語―音と意味(一)―」(『国語国文』21の8 京都大学 一九五二)
  2. 中野洋「オノマトペのイメージ」(『言語生活』229 筑摩書房 一九七〇)
  3. 村松定孝「ことばの錬金術師―泉鏡花」社会思想社 一九七三
  4. 三田英彬「『由縁の女』と鏡花文学」(『文学』第43卷第7号 岩波書店 一九七五)
  5. 笠原伸夫「由縁の女」(『解釈と鑑賞』第40卷第9号 至文堂 一九七五)
  6. 泉邦寿「擬声語・擬態語の特質」(鈴木孝夫編『日本語講座 第四卷〱日本語の語彙と表現』大修館書店 一九七六)
  7. 箕壽雄“The Function and expressiveness of Japanese onomatopes”(神戸大学『紀要』13、一九八一)
  8. エリノア・H・ジョーデン「擬声語・擬態語と英語」(国広哲弥編『日英語比較講座 第四卷〱発表と表現』大修館書店 一九八二)
  9. 山口仲美『平安文学の文体の研究』明治書院 一九八四
  10. 天沼寧「擬音語・擬態語の漢字表記」(『大妻女子大学文学部 紀要』第18号 一九八六)
  11. 『日本語学』一九八六 Vol. 5 明治書院 一九八六
  12. 大坪併治『擬声語の研究』明治書院 一九八九
  13. 玉村文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」(『日本語教育』68号 日本語教育学会 一九八九)
  14. 田守育啓「〱聴覚〱オノマトペをめぐる」(『言語』一九八九、Vol. 18 No. 11 大修館書店 一九八九)
- (辞典類)
1. 天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版 一九七四
  2. 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川書店 一九七八

3. 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館 一九八一
4. 三戸・寛編『日英対照 擬声語辞典』学書房 一九八一
5. 林巨樹編『現代国語例解辞典』小学館 一九八五
6. 金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』大修館書店 一九八八

一 覧 表

人物名 擬音語 ・擬態語	人物名				人物名 擬音語 ・擬態語	人物名			
	お光	露野	お楊	お橘		お光	露野	お楊	お橘
あはあは				1	しやん	1			1
うかうか		1			悄然(しょうぜん)			1	
うつかり	5	3			悄乎(しょうぼり)	1	2		
うつとり/恍惚		6			しんみり	2			
うろうろ		1			すたすた	1			
おつとり		1			すツ/スツ/すつ	10		2	5
おどおど		1			ずツ/ズツ	2	1		
カタリ				1	すつきり	1			
がちやん				1	すつく	1			
がツくり/がツくり		2			すつくり	1			
からり	1				スヤスヤ	2			
ガラリ	1				するする	1	1	1	
ぎう	1				すらり		1	8	
きちん/端然				2	するり	2	1		1
屹(きつ)	7				ずんずん	2			
キリリ	1				すんなり			1	
キリキリ	1				せいせい		1		
ぐい	1				密/そつ	4	7		2
くつきり	2	2			然/慄然(ぞつ)	1			1
ぐつたり		2			密(そ)			2	1
くよくよ		1			徐々(そろそろ)				1
クワツ		1			たよたよ			1	
颯/さツ/さつ	6	4	3	1	ダラリ			1	
さつさつ				1	端然(たんぜん)			1	
粗/雑(ざつ)	2				些(ち)	1			
さめざめ	1				ちゃん	1			
確/緊(しか)		1	1		丁(ちよう)				
熟/ちつ	4	6	1	5	一寸(ちよつと)	4	1		1
しつとり	1		1		ちよろちよろ	1			3
じとじと		1			ちよろり	1			
しなしな		1			ちらちら	1	4		

人物名 擬音語 ・擬態語	人物名				人物名 擬音語 ・擬態語	人物名			
	お光	露野	お楊	お橋		お光	露野	お楊	お橋
ちらり			1		ひらひら	1			
ツイ	5	1		1	ひらり	1			
つかつか	1			1	ふう				1
つけ	2				ふかり			1	
衝/ツゝ	4				ふツ	1			1
衝(つ)	3	10			ぶつ				1
つらつら	1				偶(ふ)	1	1	1	1
つるり				1	ふはり	2	1		
どつきり	1				ふゝ	1			
トン	7	1	1		ふらふら	1	1		
トン, トン			2		ぶるぶる	1	1		
トントン	1		1	2	べたべた	1			
ドン	1				ぽーつ		1		
菱々(なえなえ)		1			ほつ				1
なよなよ		1	1		ほとほと		1		
莞爾/然 (につこり)	9	5		6	ほろほろ		1		
のこのこ	1				ほろり	2	3	1	1
ハタハタ				1	ほんのり		4	1	2
ばたばた	2				ポン	1			1
はッ/ハッ/はつ	5	5	3	4	むくむく	1		1	
ばつ	2			1	むずむず		1		
ばつたり		1			ゆつくり		1		
ばつちり	1				ゆつくりゆつくり		1		
ぱつぱつ				1	よろよろ		2		
は				1	弱々(よわよわ)				
はらはら	2	1	2		凜(りん)	2	3		
はらり	1	1			わなわな				
犇(ひし)	1	1							
ひた	1	1			延べ語数	144	104	40	58
ひつたり	1								
ひよい	1			2	異なり語数	70	51	25	35